

## 大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：田中 悠登（臨床心理学コース）

<b>■研究題目</b>
親の子に対する劣位性認識尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討
<b>■研究代表者・分担者（氏名、コース）</b>
田中 悠登（臨床心理学コース・博士課程前期2年）（代表者）
<b>■研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）</b>
<p style="text-align: center;"><b>問題と目的</b></p> <p>青年期は青年が親から感情的に自立し、自分自身のアイデンティティ（Identity）を形成する時期であり（Steinberg, 2001），親子間葛藤について子どもは親とは異なった解釈をするようになるため，さらに葛藤や対立が増加することが知られている（Smetana, 1991）。令和4年における少年による家庭内暴力の認知件数は4,551件であり，令和3年は減少したものの依然増加傾向にある（法務総合研究所，2023）。主たる関与者を就学・就労状況別にみると，中学生と高校生がほとんどを占めている。親に対する攻撃性のリスク要因として，親を暴行する友人の存在や非行を肯定する姿勢，親と疎遠な関係にあること（Agnew &amp; Huguley, 1989），及び親の懲罰的な育児や経済的状况等が挙げられている（Pagani et al, 2009）。しかしながら，欧米と比較して青年の親に対する攻撃性について検討した研究は少ないのが現状である（板倉，2012）。そこで板倉（2012）は青年の親への攻撃や暴力を低減させるために操作可能な要因にアプローチする重要性を述べた上で，大学生を対象に家庭内勢力の観点から青年の攻撃性について検討している。上記の議論を踏まえると青年の親に対する攻撃性は，親の養育態度と密接な関係にあるといえる。</p> <p><b>Symonds の養育態度モデル</b></p> <p>Symonds（1939）は親の養育態度を「愛情」と「統制」の2次元から4つのタイプに分類している。子どもの行動や考えに無関心で思いやりがない無視型（neglect），子どもの</p>

気持ちを無視して自分の考えを押し付ける独裁型 (cruelty), 子どもの気持ちを尊重しすぎて, 子どものわがまを黙認している甘やかし型 (indulgence), 子どもの気持ちを汲み大切にしようとするあまり, あれこれと口やかましくなる溺愛型 (overprotection) の4つである (片山・戸田, 1994)。

**甘やかし型の養育態度** 本研究では甘やかし型の養育態度に焦点を当てる。また, 甘やかし型の養育態度と甘やかし育児は同一概念を示すものとして扱う。Feng & Cui (2023) は青年期の子を持つ親自身が甘やかし育児を認識しているほど, 親の幸福感にネガティブな影響を及ぼすことを示している。甘やかし育児は多くの時間とエネルギーを必要とするため, 親の生活において余分なストレスや否定的感情を引き起こすことや, 子どもの生活により多くの注意と労力が払われることで, 甘やかし育児の親は自分自身の幸福を顧みる機会が減少する可能性について指摘している。また, Jiao & Cui (2023) は, 甘やかし育児によって子の認知的機能が発達する機会が損なわれるために, 子の自己制御や自己効力感に負の影響を及ぼし, 社会的な対人交流を困難にさせることを示している。自己制御に関するスキルが低下するために, Cui et al. (2016) は青年期の子どもが親の育児を甘やかし型と認識しているほど, 情緒的問題 (不安や抑うつの高さ等)・行動的問題 (飲酒や薬物使用等) と正の相関を示したことを報告している。

#### 我が子に対する親の劣位性

甘やかし育児が子どもの自己制御に負の影響を及ぼすことを踏まえると, 社会的な不適応行動だけでなく, 家族成員に対する攻撃性の高さを導く可能性が指摘される。本研究では攻撃の対象となる親に焦点を当て, リスク群に対する早期介入や心理支援を行うための尺度開発を試みる。板倉 (2012) は青年の親に対する攻撃性を身体的攻撃, 言語的攻撃, 無視するといった回避的攻撃に分類している。しかしながら, 攻撃性が表面化していない青年の行動 (たとえば, 子どもがわがまを言う) も観察されることが想定され, それらを項目に反映させることでリスク群の早期発見につながるだろう。甘やかし育児がもたらす親自身へのネガティブな影響として, わがまを黙認し, 子どもの意向に過度に従ってしまうことで, 子どもに従属する立場に追いやられているという認識, 即ち我が子に対する「劣位性」を認識する可能性を想定している。これは甘やかし育児によって親自身の幸福を顧みる機会が減少し, 幸福感にネガティブな影響を与えることにも依拠しており (Feng & Cui, 2023), 子どもとの勢力関係を反映した, 操作可能な概念である。親の自尊感情がその子どもに与える影響について検討した研究は散見されるが (Furnham & Cheng, 2000; Nishimura et al., 2024), 我が子に対して受容的かつ放任的に関わった先に生じる, 親自身の存在を軽視してしまう状態について検討したものは見受けられない。また, 劣位性は子どもとの関係性によって生じる相対的な概念であり, そういった点で Johnston & Mash (1989) の「子どもに関する問題に対してある程度自信を持って対処できる」という

親に焦点を当てた自己効力感や有能感が低い状態とは区別される。若本（2013）が作成した母親としての自己効力感尺度（Parenting self-efficacy among mother；以下、MoSE とする）は「母親としての満足感」「母親としての自己効力感」「子育てに対する自己効力感」「子育てにおける無力感」の4因子構造であり、自己効力感は内的・外的な多くの要因から多大な影響を受けていることを示唆している。したがって、子どもとの関係を反映した親の認識や情動に関する尺度を開発することで、他要因の影響を排除し、子どもとの勢力関係によって生じる親のネガティブな認識に対する心理支援を可能にするだろう。しかしながら、青年が捉える家庭内勢力については検討されているものの（板倉，2012）、親が認識している子どもとの勢力関係について検討したものは見受けられない。したがって、「親の子に対する劣位性認識尺度」（以下、親の劣位性認識尺度とする）は親から見た子どもとの勢力関係を間接的に評価するものであるともいえる。

そこで本研究では青年期の我が子に対する劣位性を、親がどの程度認識しているかを測定する尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検討することを目的とした。研究全体を通して、Messick（1995）の妥当性概念の考え方に基づき、内容的側面、構造的側面、一般化可能性の側面、外的側面の証拠について検討した。

「親の劣位性認識尺度」を作成する際に、内容的側面の証拠を担保するために、臨床心理学専攻の大学教員に判断を仰ぎ、作成した項目の内容的妥当性を確認する。次に、研究全体を通して Cronbach の  $\alpha$  係数を算出し、内的一貫性について確認する。また、構造的側面の証拠として、「親の劣位性認識尺度」の因子構造について確認する。さらに、研究 2-1、2-2 では劣位性と近接する概念と想定される外的変数（自尊感情、養育態度、子ども観、親-子のコミュニケーション）との相関関係を算出することで、外的側面の証拠を示す。先述した研究は中学生から大学生を対象としたものであり、青年期における甘やかし育児のネガティブな影響が明らかにされていることから、本研究でも同様に青年期に該当し、より両親との関係が密接な中学生/高校生の子を持つ父親/母親を対象とした。

## 研究 1

研究 1 では予備調査にて劣位性に関するエピソードを自由記述により収集し、尺度に使用する項目を作成した後、本調査にて尺度の因子構造を特定し、その妥当性（構造的側面の証拠、一般化可能性の証拠）を検討することを目的とした。

### 方法

**予備調査** 調査は、2024 年 8 月に実施された。調査サービス（Freeasy）に登録しているモニターに対してスクリーニング調査を実施した後、中学生/高校生の子を 1 人以上持つ父親/母親 180 名に Web 調査を依頼した（父親：109 名，母親：71 名， $M = 47.42$  歳， $SD$

= 6.83)。調査サービスの機能を利用して、調査協力者のデモグラフィック変数について回答してもらった後、自子の年齢、性別、身分（中学生/高校生）、障害の有無について尋ねた。該当する子が複数人いる場合は、その中で年齢が一番上の子について回答してもらった。その後、ここ1年間の育児生活の中で、子どものわがままを黙認しすぎるあまり、子どもに従属しているような感覚や、自分が子どもより「下」になったような感覚に陥ったエピソード、また配偶者のそういった状況を観察した時のエピソードについて自由記述してもらった。予備調査は、東北大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得て実施された（承認番号：24-1-018）。収集されたデータについて、内容の類似している項目をまとめ、最終的に15項目が抽出され、臨床心理学を専門とする大学教員と内的妥当性を検討した。

**本調査** 調査は、2024年9月に実施された。予備調査と同条件で200名にWeb調査を依頼した（父親：131名、母親：99名、 $M = 48.08$ 歳、 $SD = 7.52$ ）。調査協力者には、予備調査で得られた15項目に対し、「1.全くあてはまらない」から「5.かなりあてはまる」の5件法で評価してもらった。本研究の解析には統計解析ソフトIBM SPSS Amos (version 22) およびIBM SPSS Statistics (version 22) を使用した。本調査は東北大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得て実施された（承認番号：24-1-036）。

**倫理的配慮** インフォームド・コンセントを実施し、本研究への協力に同意した者を調査対象者とした。調査協力者の匿名性ならびに回答の拒否や中断を保証し、それによる不利益は生じないこと、引き続き調査を依頼する可能性があることを明記した。上記の内容について、同意した者のみアンケートの回答ページに進むことができるよう設計した。

## 結果

**構造的側面の証拠** 天井効果、フロア効果を示した項目は確認されなかったため、全15項目に対し、最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。固有値（ガットマン基準）、スクリー基準、因子の解釈可能性の観点から因子を抽出した。固有値の変化は、8.93, 1.09, .89…であり、1因子構造による因子寄与率は59.53%であった。また、因子解釈の可能性の観点から1因子構造が妥当であると判断した。続いて、最尤法による確認的因子分析を行った。負荷量が.60未満の項目を削除した後、共分散が想定される項目のうち、負荷量が低いものを削除することを繰り返した結果、8項目が選定され、そのモデル適合度を表す指標は $\chi^2(20) = 25.82$ ,  $GFI = .969$ ,  $AGFI = .945$ ,  $CFI = .995$ ,  $RMSEA = .038$ であった。加算平均値ならびに標準偏差をTable 1に示す。

**一般化可能性の側面の証拠** Cronbachの $\alpha$ 係数は.94であり、1因子8項目の構造は支持されたといえる。

Table 1 「親の劣位性認識尺度」の探索的因子分析結果ならびに基礎統計量

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F1</i>
我が子が家庭のルールを守らなくても、それを指摘することに抵抗がある	2.27	1.15	.90
我が子の前ではよそよそしく振る舞う	2.18	1.22	.87
我が子の意見が間違っていると感じて、それを指摘して怒られるなら、何も言わない方がよい	2.31	1.13	.87
我が子のいいなりにしている気がする	2.25	1.18	.86
我が子の予定に振り回されると、親としての立場が低くなったように感じる	2.43	1.19	.79
我が子に対して優先的にお金を費やすことにむなしさを感じる	2.48	1.15	.78
親としての意見を、我が子は聞き入れないように感じる	2.53	1.19	.76
我が子に家事の不便を指摘されると、子どもと立場が逆転したように感じる	2.43	1.19	.69

## 考 察

予備調査では、中学生/高校生の子どもとその親の関わりを考慮した上で、項目を作成した。項目内容について「我が子が家庭のルールを守らなくても、それを指摘することに抵抗がある」「我が子の前ではよそよそしく振る舞う」等、青年期の子どもを持つ親に適応可能な表現であると捉えられ、十分な信頼性も確認されたことから、研究1で作成した尺度は妥当性検討に耐えうるものと考えられる。8項目という比較的少ない項目数であるため、調査協力者に対する負担が小さく、項目に対する正確な理解と反応が得られる可能性が高いといえるだろう。「我が子に対して優先的にお金を費やすことにむなしさを感じる」は我が子からの要求や我が子の特徴が表現されているとは言い難く、「優先的にお金を費やす」に至る文脈が不明瞭であるが、因子負荷量が十分な値を示し、モデルの適合を著しく損なうものでもなかった。これは親が我が子に対して「優先的にお金を費やす」という行為によって、親自身の幸福を顧みる機会が損なわれ (Feng & Cu, 2023)、相対的に我が子の優位性を高めることが背景にあると考えられる。したがって、子どもの特性に拠らず、親側の行為のみによっても劣位性を認識する可能性が示唆された。

## 研 究 2-1

研究2-1では、研究1で作成した「親の劣位性認識尺度」の外的側面の証拠について検討することを目的とした。外的変数には「自尊感情」「養育態度」を取り上げることにした。

自尊感情とは、自己の尊重や価値を評価する程度のことであり (Rosenberg, 1965)、親の「子どもに従属しているような感覚」は自尊感情が低い状態とも捉えられるため、子に対する親の劣位性は自尊感情との負の相関が予想される。

養育態度について、研究2-1では鈴木他(1985)の養育態度尺度と井澗(2010)の Parenting Scale 尺度 (以下 PS 尺度) を使用した。鈴木他 (1985) の養育態度尺度は、「愛情」の次元に相当する「受容的・子ども中心のかかわり」、「統制」の次元に相当する「統制のかかわり」、統制の仕方に一貫性がみられない「責任回避的かかわり」の3因子30項目の構造を成している。本尺度とは「受容的・子ども中心のかかわり」と正の相関を示し、「統制

的かかわり」とは負の相関を示すと考えられる。「責任回避的かかわり」については「子どもが同じことをしても、時によって叱ったりほうっておいたりしてしまう」といった統制の仕方に関する項目や、「子どもにがんばられて、子どもの考え通りになりやすい」といった研究1で作成したものと関連が想定される項目も見受けられる。そこで、統制の所在が不明瞭という点で劣位性と関連がみられると判断し、「責任回避的かかわり」と正の相関があると予測した。PS尺度について、「怒鳴る」や「口やかましくなる」等、過剰な反応に関する項目である「過剰反応」と、その場をやり過ごす「緩さ」の2因子18項目の構造を成す。本尺度は「緩さ」と正の相関を示し、「過剰反応」とは負の相関を示すことが考えられる。

### 調査協力者と手続き

調査は、2024年11月に実施された。研究1と同条件で200名にWeb調査を依頼した。なお、オンライン調査では調査協力者が回答に必要な注意資源を十分に割かないことで、調査に対する正確な理解が回答に反映されない可能性がある（三浦・小林，2015）。そこで本研究では、無回答を指示するIMC（instructional manipulation check）を、質問紙の途中に1問記載した。この質問に回答したデータは不良回答の可能性が高いと判断し、分析の際には排除した。

**倫理的配慮** 研究1と同様の倫理的配慮を行った。研究2-1は東北大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得て実施された（承認番号：24-1-048）。

**調査内容** (a)研究1で作成した8項目について「1.全くあてはまらない」から「5.かなりあてはまる」の5件法で回答を求めた。(b)Rosenberg（1965）が作成し、山本他（1982）が邦訳した自尊感情尺度を使用した。1因子10項目の構造であり、各項目について「1.あてはまらない」から「5.あてはまる」の5件法で回答を求めた。(c)鈴木他（1985）が作成した養育態度尺度を使用した。この尺度は親が子どもに対してどのような態度を持っているか、を親に尋ねる尺度である。「受容的・子ども中心のかかわり尺度」「統制のかかわり尺度」「責任回避的かかわり尺度」の3因子30項目の構造である。調査対象者が幼稚園以上の子どもの持つ親であったが、今回の調査においても適用可能と判断した。各項目について「1. まったくそうではない」から「5. たしかにそうだ」の5件法で回答を求めた。(d)井潤（2010）が作成した日本語版PS尺度を使用した。この尺度は「過剰反応尺度」10項目と、「緩さ尺度」8項目の2因子構造である。評価方法について、SD法の形式を取り、子どもの問題行動に対応するのに効果的なしつけ方略が1点、非効果的なしつけ方略が7点としてスコアする。

### 結果

**分析対象者の選定** IMC課題に回答したデータは除き、135名分の回答を分析対象とし

た（父親：87名，母親：48名， $M = 48.99$ 歳， $SD = 7.28$ ）。

**構造的側面の証拠** 確認的因子分析の結果，本尺度のモデル適合度は許容範囲であった（ $\chi^2(20) = 30.11$ ， $GFI = .943$ ， $AGFI = .897$ ， $CFI = .978$ ， $RMSEA = .061$ ）。

**一般化可能性の側面の証拠** 本尺度の Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ，.86であった。本尺度の加算平均値は 1.97（ $SD = 0.75$ ）であった。

**外的側面の証拠** 外的変数として用いた尺度の  $\alpha$  係数並びに記述統計量を Table 2 に示した。性別，年齢を統制変数として，外的変数との偏相関係数を算出した（Table2）。緩さの  $\alpha$  係数は .67 と若干低い値ではあったものの，概ね .70 以上であり，井濶（2010）が示した  $\alpha$  係数と同様の値であったことから，原版の因子構造を採用した。

「親の劣位性」は過剰反応（ $pr = .52$ ， $p < .001$ ，95% [.38 - .63]），緩さ（ $pr = .52$ ， $p < .001$ ，95% [.38 - .64]），責任回避的かかわり（ $pr = .56$ ， $p < .001$ ，95% [.43 - .67]）と有意な正の相関を示し，自尊感情（ $pr = -.39$ ， $p < .001$ ，95% [-.53 - -.23]），受容的・子ども中心のかかわり（ $pr = -.46$ ， $p < .001$ ，95% [-.58 - -.31]）と有意な負の相関を示した。統制的関わり（ $pr = .12$ ， $n.s.$ ）とは有意な相関がみられなかった。性差によって劣位性の尺度得点に差があるかどうかを検討したところ，有意な差は見られなかった（ $t(133) = 1.32$ ， $n.s.$ ）。

## 考 察

研究 2-1 では「親の劣位性認識尺度」の外的側面の証拠について検討することを目的とした。分析の結果，本尺度は受容的・子ども中心のかかわり，過剰反応，統制的関わりを除き，概ね想定通りの関連を示した。劣位性と自尊感情には負の関連があり，劣位性を強く認識しているほど親の精神的健康が低下する可能性が示唆された。

研究 2-1 の結果からは親の劣位性認識と受容的なかかわり行動には負の関連があることが示唆された。また，本尺度が PS 尺度における一貫した対応が取れず，子どもに譲歩する姿勢を示す緩さだけでなく，過剰反応とも有意な正の相関がみられたことから，親の劣位性は我が子に対して放任的に関わるだけでなく，感情的に厳しく関わった場合にも生起する可能性が示唆された。過剰反応の項目は「私はイライラしたり頭に血が上って，子どもにも分かるほど冷静さを失う」「声を上げたり，怒鳴ったりする」といった親自身の感情を発散するような表現が多いものの，それによって子どもの行動が，親の意図した通りになっている文脈は表現されていない。したがって，親は子どもをコントロールするために過剰な反応を示すものの，子どもがその通りに行動するという結果には至っておらず，子どものわがままが認められている状況が成立している可能性が想定されることから，変数間に有意な正の相関がみられたと考えられる。また，井濶（2010）は日本語版 PS 尺度の妥当性検討に，Johnston & Mash（1989）が作成した親としての自己有能感を測定する Parenting Sense of Competence（以下，PSOC とする）を使用しており，過剰反応と PSOC の負の関連性を示したことから，親が過剰反応を示すほど親としての有能感が低下するた

め、劣位性を強く認識することが想定される。一方で、統制的かかわりについて、項目内容には「子どもが外から時間通り帰ってくるようにいつもさせている」「子どもを、自分の言いつけどおりに従わせている」といった、親の意向通りに子どもが行動する意味合いが含まれており、子どものわがままを黙認しているという状況が反映されておらず、有意な関連がみられなかった可能性が指摘される。したがって、子どもの行動をコントロールできていない状況が表現されている責任回避的関わりのみと劣位性が正の相関を示したと考えられる。

上記の議論を踏まえると、我が子の行動をコントロールしようと「拒否」的な姿勢を取るものの、「干渉—放任」の次元を行き来しているために統制の所在が不安定で、自身の関わりによって子どもの行動変容が生じない、つまり子どもに対して影響力を持たないことを自覚している親ほど劣位性を認識しやすいと考えられる。しかしながら、「愛情」と「統制」の次元をそれぞれ別の尺度で測定したため、「愛情」かつ「放任」の次元に相当する甘やかし型の影響が十分に反映されていない可能性も指摘される。

## 研究 2-2

研究 2-2 では、「親の劣位性認識尺度」における構成概念妥当性（外的な側面の証拠）を再検討することを目的とした。目的達成のために福丸（1999）が作成した「子ども観尺度」と黒川（1990）の「親—青年期の子どものコミュニケーション」尺度（以下、親—子のコミュニケーション尺度とする）を使用した。

福丸（1999）は子ども観尺度の項目を、子どもに対しての考え方、すなわち「子どもを自分の中でどのような意味を持つ存在と捉えているか」を問うものと述べており、本研究でも同様の定義を用いる。永澤（1996）は子ども観と養育態度の関連について親の子ども観をそのまま反映した形で行動するとはいえなくとも、その子ども観と全く反するような行動を取ることは少ないという見解を述べていたが、子ども観の特徴と養育態度は必ずしも一致しないことが示唆されたため、ポジティブな子ども観を有していたとしても、養育態度には反映されない場合もあることが想定される。小武内（2011）は親子関係におけるしつけ者（親）に焦点を当て、中学生または高校生の子どものを持つ親を対象に、しつけに伴う悩みや葛藤、それによる成長に関する尺度を作成した。「しつけの悩み・葛藤尺度」には、「子どもに任せたいと思っても、不安でつい口出ししてしまう」といったしつけを巡る硬直した対応を示す「対応の硬直」や、「しつけのために子どもの秘密に介入するか、プライベートとして尊重するか迷う」といった「対応への困惑」等の因子で構成されており、青年期の子どもを持つ親は自らの関わりについて葛藤状態にあるといえる。したがって、態度や行動レベルで受容的か否かではなく、親の子どもに対する価値観やその心理的背景との関連を検討することで外的な側面の証拠について確認する必要性は高いと判断

した。福丸（1999）の尺度は、子どもは自分の人生に充実感をもたらす等子どもを肯定的に捉える「充実・楽しみ」、子どものために自分のやりたいことが制限され、経済的な負担を感じる「制約・負担」、子どもをもって初めて社会的に認められるといった、子育てにも社会的な意義を見出す「社会的存在」、子どもが自分にとっての生きがいであり、何より大切なものは子どもであるという「生きがい」、子どもに関心を持ってないことや子どもにあまり大きな価値を置かない「無関心・低価値」の5因子構造である。各因子について十分な内的一貫性が確認されている。相関分析の結果を以下のように予測した。劣位性が子どもの意向や要求を優先してしまう先に生じるものであると仮定すると、子どもに対して肯定的な価値観（「充実・楽しみ」「生きがい」と劣位性には正の相関がみられ、否定的な価値観（「制約・負担」「無関心・低価値」とは負の相関がみられる。

黒川（1990）の「親-子のコミュニケーション」尺度は「率直な家族コミュニケーション」と「拒否的な家族コミュニケーション」の2因子構造であり、各因子について十分な内的整合性が示されている。本尺度を採用した理由は、親が自らの行動をどう認識しているかだけでなく、親子間でどのような関わりが生じているのか、子どもに焦点を当てた行動についても考慮する必要性が高いと判断したためである。研究 2-1 で使用した鈴木他（1985）の養育態度尺度は親が自身の養育態度を評価するものであり、項目によっては親の行動による子どもの反応について表現されたものもある。しかしながら、子どもからの行動について黒川（1990）の尺度には含まれており（例えば、「子は、私に小言を言う」）、本尺度を使用することで親子関係を親と子どもの双方の視点から捉えることが可能になる。そして研究 2-1 において、本尺度が受容的なかわり行動とは負の関連を示し、過剰反応とは正の関連があったことを踏まえ、親は子と良好なコミュニケーションというよりも、ネガティブなコミュニケーションを頻繁に取っている可能性も高い。したがって、相関分析の結果を以下のように予測した。親の劣位性は率直な家族コミュニケーションとは負の相関がみられ、拒否的な家族コミュニケーションとは正の相関がみられる。

### 調査協力者と手続き

調査は、2025年1月に実施された。研究1、研究2-1と同条件で249名にWeb調査を依頼した。研究2-1と同様に注意力チェックを行い、IMC課題に回答したデータは分析の際に排除した。

**倫理的配慮** 研究1、研究2-1と同様の倫理的配慮を行った。研究2-2は東北大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得て実施された（承認番号：24-1-074）。

**調査内容** (a)研究1で作成した8項目について「1.全くあてはまらない」から「5.かなりあてはまる」の5件法で評価してもらった。(b)福丸（1999）の子ども観尺度を使用した。乳幼児を持つ父親・母親を対象に検討されたものであったが、青年期の子も持つ親にも適応可能だと判断した。父母間で異なる因子負荷量を示す項目が確認されたため、本研究で

は父母間で同様の因子負荷量を示す 19 項目を採用した。「充実・楽しみ」「制約・負担」「社会的存在」「生きがい」「無関心・低価値」の 5 因子構造であり、調査協力者には「1. 違う」から「4. その通りである」の 4 件法で回答を求めた。(c)黒川 (1990) の親-青年期の子どものコミュニケーション尺度 (以下、親-子のコミュニケーションとする) を使用した。尺度は「率直な家族コミュニケーション」「拒否的な家族コミュニケーション」の 2 因子 20 項目で構成され、調査協力者には「1. 全くそう思わない」から「5. そう思う」の 5 件法で回答を求めた。

## 結 果

**分析対象者の選定** IMC 課題に回答したデータは除き、190 名分の回答を分析対象とした (父親: 118 名, 母親: 72 名,  $M = 49.88$  歳,  $SD = 7.00$ )。

**構造的側面の証拠** 確認的因子分析の結果、RMSEA の値がやや高かったものの、許容できるものと判断した ( $\chi^2(20) = 54.48$ , GFI = .932, AGFI = .878, CFI = .953, RMSEA = .096)。

**一般化可能性の側面の証拠** 本尺度の Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ、.90 であった。本尺度の加算平均値は 1.90 ( $SD = 0.74$ ) であった。また、約 2 か月後における再検査信頼性係数は  $r = .70$  ( $p < .01$ ) を示したため、時間的安定性についても確認された。

**外的側面の証拠** 外的変数として用いた尺度の  $\alpha$  係数ならびに記述統計を Table 2 に示した。研究 2-1 と同様に性別、年齢を統制変数として偏相関係数を算出した (Table 2)。

「親の劣位性」は「制約・負担」( $pr = .50, p < .001, 95\% [.39-.60]$ ), 「無関心・低価値」( $pr = .59, p < .001, 95\% [.48-.67]$ ), 「拒否的な家族コミュニケーション」( $pr = .71, p < .001, 95\% [.64-.78]$ ) に対して有意な正の関連を示した。一方で、「充実・楽しみ」( $pr = -.58, p < .001, 95\% [-.67-.48]$ ), 「生きがい」( $pr = -.52, p < .001, 95\% [-.62-.41]$ ), 社会的存在 ( $pr = -.17, p < .05, 95\% [-.30-.02]$ ), 「素直な家族コミュニケーション」( $pr = -.50, p < .001, 95\% [-.60-.39]$ ) に対して有意な負の関連を示した。性差によって劣位性の尺度得点に差があるかどうかを検討したところ、有意な差は見られなかった ( $t(188) = .59, n.s$ )。

## 考 察

研究 2-2 では「親の劣位性認尺度」の外的側面の証拠について再検討することを目的とした。分析の結果、親-子のコミュニケーションに関しては予測した相関関係が確認された。

親の劣位性は制約・負担、無関心・低価値と有意な正の関連を示し、充実・楽しみ、いきがいは有意な負の関連を示したことから、子どもに対して否定的な価値観を有している親ほど劣位性を認識しやすいことが示唆された。尺度開発にあたり、変数間の因果関係について言及することはできないが、劣位性と否定的な子ども観は密接な関係にあると

Table 2 「親の劣位性認識尺度」と外的変数の相関関係

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>α</i>	親の劣位性 <i>pr</i>
研究 2-1				
自尊感情	3.18	0.80	.89	-.39 ***
過剰反応	3.26	1.00	.87	.52 ***
緩さ	3.54	0.74	.67	.52 ***
受容的・子ども中心のかかわり	3.70	0.57	.85	-.46 ***
統制のかかわり	2.73	0.61	.82	.12
責任回避のかかわり	2.53	0.62	.85	.56 ***
研究 2-2				
充実・楽しみ	3.30	0.60	.91	-.58 ***
制約・負担	2.42	0.70	.88	.50 ***
社会的存在	2.84	0.62	.65	-.17 *
生きがい	3.26	0.69	.81	-.52 ***
無関心・低価値	1.69	0.71	.65	.59 ***
素直な家族コミュニケーション	3.58	0.71	.90	-.50 ***
拒否的な家族コミュニケーション	2.44	0.73	.86	.71 ***

\**p* < .05, \*\*\**p* < .001

いえる。つまり、我が子をネガティブな存在として捉え、育児に生じる負担を軽減するために子どもの行動を制御しようとするものの、行動を統制することができず、わがままが認められることで我が子に対する劣位性を認識する可能性が想定される。したがって、子ども観と自らの関わり行動が一致しているほど、劣位性を認識しやすいとも捉えられ、これは自身の関わり行動を葛藤状態に帰属することができないために、我が子の優位性をより直接的に認識するからかもしれない。福丸（1999）は子ども観と夫婦の調和性、経済的満足度など家庭環境を規定する要因について多角的に検討しているものの、親の子ども観を規定する要因については明らかになっていない。今後は調査協力者の家庭環境を反映させた検討を行うことで、劣位性を認識しやすい親の特徴についてより明瞭な理解が得られるだろう。素直な家族コミュニケーション、拒否的な家族コミュニケーションのそれぞれと想定された相関関係が確認されたことから、研究 2-1 と一貫した結果が得られ、本尺度には我が子との関わりが反映されているといえる。

## 総 合 考 察

本研究では「親の劣位性認識尺度」を開発することを目的とした。項目作成については臨床心理学を専攻する大学教員と協議した上で、内容的妥当性について確認した。また、研究 1 から研究 2-2 を通して  $\alpha$  係数が十分な値を示したため、内的一貫性が示され、さらに研究 2-2 において時間的安定性が確認された。それに加え、研究 1 から研究 2-2 を通してモデル適合度が許容できる値を示したため、構造的側面の証拠が確認された。しかしな

がら、研究 2-1 から研究 2-2 を通して外的変数との相関関係を検討した結果、一部において予測通りの相関関係が確認された。したがって、内容的側面、一般化可能性の側面の証拠、構造的側面から証拠は得られたものの、外的側面の証拠について確認されたとは言い難い。現時点では親の劣位性に関する知見が不十分であるため、本研究には探索的な検討の意味合いも含まれていた。今後は家族機能や家庭内の社会的勢力といった多角的な視点から劣位性を考察する必要があるだろう。

Symonds (1939) の甘やかし型の養育態度と劣位性には負の相関があることが示された。甘やかし型は子どものわがママが黙認されやすく、親自身の幸福を顧みる機会を損なわせるために (Feng & Cui, 2023), 親が劣位性を認識しやすいことを想定していたが、実際には我が子を制御する行動を示すものの、最終的に我が子の要求が満たされる状況に陥っている親ほど、我が子の優位性を高く評価する傾向にあるという結果に至った。これは親が我が子に対する有効な関わり行動を模索している段階であるため、親の努力や工夫が結果に結びつかないことによって、我が子の優位性を際立って認識するからかもしれない。田中・若島 (印刷中) は家族成員から矛盾したメッセージを寄せられた経験が多いほど、親子の信頼関係が損なわれることを明らかにしているため、「干渉—放任」を往還するような不安定な関わりはかえって子どもの親に対する反感を高める要因となり得るかもしれない。

本研究を通して得られた結果から「親の劣位性」について、親が子どもに対して否定的な価値観を持ち、青年期の我が子の言動に対して自身の意向通りに制御しようと試みるものの、不安定な関わり行動をとってしまい、子どものわがママや要求が間接的に認められることで親が我が子に従属したような状況を認識することが示唆された。こういった関わり蓄積により、親の自尊感情が低下し、親子間で拒否的なコミュニケーションが日常的に行われていることが想定される。劣位性を認識する背景には、青年が親から自立し、アイデンティティ (Identity) を形成する中で (Steinberg, 2001), 親子間葛藤増加するために (Smetana, 1991), 親も自身の関わりを見直す機会となり、関わり方が不安定になることがあると考えられる。それに加え、研究 1 において我が子の特性によらない、親自身の行為によって認識される劣位性について示唆された。したがって、親と子の関係だけでなく、親自身の感情や思考、特性に焦点を当てた劣位性の概念そのものの検討も必要といえるだろう。

また、青年期の子どもの攻撃の対象となり得る親を対象に、リスク群に対する早期介入や心理支援を行うためのアセスメントツールを開発することも目的としていた。分析の結果、劣位性を認識しているほど、親の自尊感情が低いことが示唆されたことから、本尺度はアセスメントツールとしての機能を一部有しているといえる。今後は精神的健康の指標について幅広く変数を取り上げ、アセスメントツールとして機能するか否かについてはさらなる検討が求められる。8 項目と少ない項目数で構成されているため、回答における負

担が小さく、幅広く活用されることが期待される。板倉（2012）の「青年の父親/母親への攻撃性尺度」において、特に身体的攻撃、言語的攻撃には、「父親/母親にばかにされたら、なぐりたくなるかもしれない」「父親/母親に対して、躊躇なく皮肉屋悪口を言うことがある」といった項目が含まれている。一方で、本尺度の項目には「我が子の予定に振り回されると、親としての立場が低くなったように感じる」「我が子に家事の不手際を指摘されると、子どもと立場が逆転したように感じる」といった攻撃性が比較的表面化されていないものが含まれており、「わがまま」のニュアンスを反映しているといえるかもしれない。親が劣位性を認識している状態は子どもの行動を統制することが困難である状況としても捉えられ、攻撃の対象となっている可能性が想定されるが、本研究では概念の精緻化や尺度の妥当性検討に注力したため、子どもの要因との関連性を探求するには至らなかった。今後の研究では親の劣位性の構造を明瞭化することと並行して、劣位性の高さを示す親の子どもの特徴についても検討することで、劣位性に関する臨床的示唆を提示することができるだろう。

#### 利益相反

本研究は、著者が所属する東北大学大学院教育学研究科先端教育実践センターの助成を受け、実施された。

#### 引用文献

- Agnew, R., & Huguley, S. (1989). Adolescent violence toward parents. *Journal of Marriage and the Family*, 51, 699-711. <https://doi.org/10.2307/352169>
- Cui, M., Graber, J. A., Metz, A. & Darling, C. A. (2016). Parental indulgence, self-regulation, and young adults' behavioral and emotional problems. *Journal of Family Studies*, 233-249. <https://doi.org/10.1080/13229400.2016.1237884>
- Feng, Q. & Cui, Ming. (2023). Indulgent Parenting and the Psychological Well-Being of Adolescents and Their Parents. *Children*, 10, 451- 463. <https://doi.org/10.3390/children10030451>
- Furnham, A. & Cheng, H. (2000). Perceived parental behaviour, self-esteem and happiness. *Social Psychiatry Psychiatric Epidemiology*, 35, 463-470. <https://doi.org/10.1007/s001270050265>
- 法務総合研究所（2023）．令和5年度犯罪白書-非行少年と生育環境— Retrieved September 26, 2024, from [https://www.moj.go.jp/housouken/housouken03\\_00127.html](https://www.moj.go.jp/housouken/housouken03_00127.html)
- 福丸 由佳・無藤 隆・飯長 喜一郎（1999）．乳幼児の子どもを持つ親における仕事観、子ども観—父親の育児参加との関連— 発達心理学研究, 10(3), 189-198. <https://doi.org/10.11201/jjdp.10.189>

- 板倉 憲政 (2012) . 家庭内の勢力関係と親に対しての青年の攻撃性との関連 家族心理学研究, 26 (2), 129-144. [https://doi.org/10.57469/jafp.26.2\\_129](https://doi.org/10.57469/jafp.26.2_129)
- 井澗 知美 (2010) . Parenting Scale 日本語版の作成および因子構造の検討 心理学研究, 81 (5), 446-452. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.81.446>
- Jiao C. & Cui, M. (2023). Indulgent parenting, self-control, self-efficacy, and adolescents' fear of missing out. *Current Psychology*, 43, 2186-2195. <https://doi.org/10.1007/s12144-023-04450-2>
- Johnston, C., & Mash, E.J. (1989). A measure of parenting satisfaction and efficacy. *Journal of Clinical Child Psychology*, 18, 167-175. [https://doi.org/10.1207/s15374424jccp1802\\_8](https://doi.org/10.1207/s15374424jccp1802_8)
- 片山美由紀・戸田浩二. (1994). 対人関係. 堀 洋道・山本真理子・松井 豊編. 心理尺度ファイル. 垣内出版. pp. 350-399.
- 黒川 潤 (1990) . 円環モデルに基づく尺度 (和訳版) の標準化の試み——家族満足度, 親—青年期の子どものコミュニケーション, FACEⅢ—— 家族心理学研究, 4(2), 71-82. [https://doi.org/10.57469/jafp.4.2\\_71](https://doi.org/10.57469/jafp.4.2_71)
- 三浦 麻子・小林 哲郎 (2015) . 「オンライン調査モニタの Satisfice に関する実験的研究」 社会心理学研究, 31(1), 1-15. [https://doi.org/10.14966/jssp.31.1\\_1](https://doi.org/10.14966/jssp.31.1_1)
- Messick, S. (1995). Validity of psychological assessment: Validation of inferences from persons' responses and performances as scientific inquiry into score meaning. *American Psychologist*, 50(9), 741-749. <https://doi.org/10.1037/0003-066X.50.9.741>
- 永澤 道代 (1996) 母親の子ども観と養育態度の関係 追手門学院大学心理学論集, 4, p.11-21.
- Nishimura, Y., Shimizu, H., & Nakashima, K. (2024). Effects of parental self-esteem on depression, autonomy, and career consciousness among children: A replication study focusing on the mediation of parenting behaviors. *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 63(2), 67-73. <https://doi.org/10.2130/jjesp.2207>
- 小武内 行雄 (2011) . しつけを通じた親の「悩み」「成長」と子どもにおけるしつけ認知との関連 教育心理学研究, 59 (4), 414-426. <https://doi.org/10.5926/jjep.59.414>
- Pagani, L. S., Tremblay, R. E., Nagin, D., Zoccolillo, M., Vitaro, F. & McDuff, P. (2009). Risk Factor Models for Adolescent Verbal and Physical Aggression Toward Fathers. *Journal of Family Violence*. 24, 173-182. <https://doi.org/10.1080/01650250444000243>
- Rosenberg, M. (1965) . *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.
- Steinberg, L. (2001). We Know Some Things: Parent-Adolescent Relationships in Retrospect and Prospect. *Journal of Research Adolescence*, 11(1), 1-19. <https://doi.org/10.1111/1532-7795.00001>
- Smetana, J. G. (1991). Adolescent's and mother's evaluation of justifications for conflicts. *New*

*Directions for Child and Adolescent Development*, 51, 71-86.

<https://doi.org/10.1002/cd.23219915106>

鈴木 眞雄・松田 惺・永田 忠夫・植村 勝彦（1985）.子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家族環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成 愛知教育大学研究報告, 34, 139-152.

Symonds, P.M. (1939). *The psychology of parent-child relationships*. Appleton Century Crofts.

田中 悠登・若島 孔文（印刷中） 二重拘束的体験尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 家族心理学研究, 38 (2) .

若本 純子（2013）. 母親としての自己効力感一尺度の作成と信頼性, 内的・外的妥当性の検証— 家族心理学研究, 27, 16-28. [https://doi.org/10.57469/jafp.27.1\\_16](https://doi.org/10.57469/jafp.27.1_16)

山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子（1982）. 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68. [https://doi.org/10.5926/jjep1953.30.1\\_64](https://doi.org/10.5926/jjep1953.30.1_64)